

早期英語教育と臨界期に関する研究

Studies in critical period for teaching English to children

服部 孝彦¹

¹大妻女子大学英語教育研究所

Takahiko Hattori¹

¹The Institute for Research in English Education, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：早期英語教育，臨界期仮説，言語習得

Key words : Teaching English to children, Critical period hypothesis, Language acquisition

抄録

早期英語教育の考え方の理論的根拠として臨界期仮説をあげることができる。しかし現在まで、臨界期があるかどうかについては明確な結論は出ていない。本研究ではまず母語習得と臨界期の先行研究を概観する。その上で第二言語習得に関する臨界期の先行研究を概観し、研究動向を掌握する。そして臨界期が今後解明すべき課題について、言語習得環境からの視点も踏まえながら考察を行う。それらを踏まえ、2020年4月から全国の公立小学校で実施されている英語教育の有効性について、第二言語習得理論の立場から検討をする。

1. はじめに

第二言語習得研究は1950年代から本格的に研究が進められるようになった学問分野である。第二言語習得研究でよく議論されるのは、第二言語学習者は母語話者と変わらない程の第二言語能力を身につけることが可能かというものである。母語話者と同程度の第二言語能力を身につけるためには、早い時期から学習を始めるべきであるとする臨界期仮説は、第二言語の学習開始年齢を議論する場合、避けて通れない。

臨界期は、ある行動様式を身につけるために最も適した時期のことである。言語に関しては、高度な言語能力が比較的容易に習得できる期間といえる。臨界期仮説によると、この期間を過ぎてしまうと言語を不完全にしか習得できないとしている。

母語習得には臨界期があると一般的には認知されている。第二言語習得にも臨界期は存在するののかという問いに対し、研究者の間では議論が繰り返されてきた。その結論については、いまだ確固とした合意は得られてはいない。しかし学習開始年齢が第二言語習得の成否に影響を与えることは多くの研究者が認めているところである。

2. 第二言語環境と外国語環境

母語以外の言語を学習する場合、言語学習環境の違いを考慮に入れなくてはならない。すなわち第二言語環境なのか外国語環境なのかをはっきりと区別しておく必要がある。当該言語が日常的に使用されている場合、その言語は第二言語であり、その学習環境を第二言語環境という。一方、当該第二言語が日常では使用されておらず、学校教育で学習するのは外国語であり、その学習環境を外国語環境という。

大人の第二言語学習者は認知能力が発達しているので、それを使った明示的学習(explicit learning)が得意である。これに対して子どもは暗示的学習(implicit learning)を得意としている(DeKeyser, Alfi-Shabtay & Ravid, 2010; Paradis, 2004; Paradis, 2009) [1][2][3]。明示的学習は意識的な学習であるが、暗示的学習は無意識的な学習である。子どもが暗示的学習をし、第二言語習得の優位性を発揮するためには大量のインプットが必要である。暗示的学習と豊富なインプットを可能にするのが第二言語環境である。日本のような外国語環境では英語習得に必要なインプットが非常に限られてしまっており、無意識な暗示的学習を得意とする子ども

たちの優位性は発揮できない。外国語環境では、英語学習は早いほうがよいということは、必ずしも当てはまらない可能性もある。

3. 母語習得の臨界期

人間が学習する行動領域では、成長と共に能力が増していくものが多い。しかし領域によっては能力が成長と共に増大するのではなく、幼少期に頂点に達し、その時期を過ぎると学習能力が下降してしまうものがある。臨界期仮説によると、言語を習得するために生物的に備わっている能力は、生後からある一定の期間のみに利用できるという。

母語の臨界期は Lenneberg (1967)^[4]が言語機能の側化と失語症の関連に基づき提案したものである。Lenneberg は、後天性の小児性失語症の言語能力回復具合から臨界期の存在を証明した。小児性失語症は2歳頃までの発症では、一度は完全に言語を失うものの、その後は順調に回復していく。2歳より少し年齢が上がると、言語は完全には失われず、言語が少し残った状態から問題なく言語能力は回復する。発症年齢が上がるにつれて、損傷を受けないで残る言語能力は大きくなるものの、失語症からの回復は鈍くなる。Lenneberg は、若年層の失語症患者は、最終的に言語は完全に回復するが、失語症になった年齢が12歳から13歳を超えると十分な回復ができなくなるという症例結果から母語習得の臨界期を12歳～13歳とした。この研究によって、正常な母語習得は思春期が始まる頃までに起きるという行動的証拠が示された。

母語習得の臨界期については、Lenneberg以降、様々な研究が行われた。ほとんどの研究結果は、母語習得は人間に生物学的に備わっている能力で、生後からある一定の期間に利用できるとしている。この期間を過ぎても言語習得は不可能ではないが、ひどく阻害されてしまう結果となるとの主張である。

4. 第二言語環境における第二言語習得の臨界期

Lenneberg (1967)^[4]の研究は、母語習得に臨界期があることを明らかにした。母語習得の後に学習を開始する第二言語にも臨界期はあるのであろうか。第二言語の臨界期について、多くの研究報告がされている。

第二言語習得の臨界期について研究している研究者の主張は次の3つに分類できる。(1)第二言語

習得には臨界期が存在するという立場、(2)第二言語習得に臨界期が存在することに懐疑的な立場、(3)第二言語習得にはただ1つの臨界期が存在するのではなく、質的に異なる複数の臨界期があるという立場である (VanPattern & Benati (2015)^[5])。

(1)については Oyama (1976)^[6]の研究、Flege, Yen-Komshian & Lui (1999)^[7]の研究、Johnson & Newport (1989)^[8]の研究を中心に考察した。(2)については Neufeld (1980)^[9]の研究、Birdsong (2005)^[10]の研究、Herschensohn (2008)^[11]の研究を中心に考察した。(3)については、Seliger (1978)^[12]の研究を中心に考察した。これらの研究成果を総括すると第二言語環境では、第二言語学習の開始時期は早ければ早いほど良いという考えは支持されている。

5. 外国語環境における第二言語習得の臨界期

外国語を日常生活で使う必要性がほとんどない外国語環境では、早期第二言語学習の効果があるかどうかは疑わしいという研究報告が多い。外国語環境における第二言語の早期学習の効果については、Ojima et al.(2011)^[13]の研究を中心に考察、続いて Muñoz (2006a, 2006b)^{[14][15]}を基にバルセロナ年齢要因(Barcelona Age Factor, BAF)プロジェクトの考察、さらに Larson-Hall (2008)^[16]の研究についての考察を行った。これらの研究成果を総括すると外国語環境では、第二言語学習の開始時期を早くしても実質的效果はほとんど表れていないと結論づけることができる。

6. おわりに

本研究では、母語習得と臨界期の先行研究、第二言語習得と臨界期の先行研究を概観した。そして2つの言語習得環境、すなわち第二言語環境における臨界期と、外国語環境における臨界期について、これまでの研究成果を考察した。

第二言語環境においては、早期英語教育の効果は期待できるが、外国語環境では、早期英語教育が効果的であるという研究結果は得られていない。外国語環境では、インプットの量があまりにも少なすぎるので、音声面でさえも早期英語教育の効果はほとんどないと考えられる。日本という外国語環境での早期英語教育の技能面での効果は、残念ながらあまり期待できないといえる。

引用文献

- [1]DeKeyser, R., Alfi-Shabtay, I. & Ravid, D. (2010). Cross-linguistic Evidence for the Nature of Age Effects in Second Language Acquisition. *Applied Psycholinguistics* 31(3), 413-438.
- [2]Paradis, M. (2004). *A Neurolinguistic Theory of Bilingualism*. Amsterdam: John Benjamins.
- [3]Paradis, M. (2009). *Declarative and Procedural Determinants of Second Languages*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- [4]Lenneberg, E. H. (1967). *The Biological Foundations of Language*. New York: John Wiley and Sons.
- [5]VanPattern, B., & Benati, A. G. (2015). *Key Terms in Second Language Acquisition, Second Edition*. London: Bloomsbury Publishing.
- [6]Oyama, S. (1976). A sensitive Period for the Acquisition of a Non-native Phonological System. *Journal of Psycholinguistic Research*, 5, 261-284.
- [7]Flege, J. E., Yeni-Komshian, G. H., & Liu, S. (1999). Age Constraints on Second-language Acquisition. *Journal of Memory and Language*, 41, 78-104.
- [8]Johnson, J., & Newport, E. (1989). Critical Period Effects in Second Language Learning: The Influence of Maturation State on the Acquisition of English as a Second Language. *Cognitive Psychology*, 21, 60-99.
- [9]Neufeld, G. G. (1980). On the Adult's Ability to Acquire Phonology. *TESOL Quarterly*, 14, 285-298.
- [10]Birdsong, D. (2005). Interpreting Age Effects in Second Language Acquisition. In J. Kroll., & A. M. B. de Groot (Eds.), *Handbook of Bilingualism: Psycholinguistic Approaches* (pp. 109-127). Oxford: Oxford University Press.
- [11]Herschensohn, J. (2008). *Language Development and Age*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [12]Seliger, H. (1978). Implications of Multiple Critical Period Hypothesis for Second Language Learning. In W. Ritchie (Ed.), *Second Language Acquisition Research: Issues and Implications* (pp. 11-19). New York: Academic Press.
- [13]Ojima, S., Matsba-Kurita, H., Nakamura, M., Hoshino, T., & Hagiwara, H. (2011). Age and Amount of Exposure to a Foreign Language during Childhood: Behavioral and ERP Data on the Semantic Comprehension of Spoken English by Japanese Children. *Neuroscience Research*, 70(2), 197-205.
- [14]Muñoz, C. (2006a). The Effects of Age on Foreign Language Learning. In C. Muñoz (Ed.), *Age and the Rate of Foreign Language Learning* (pp. 1-40). Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- [15]Muñoz, C. (2006b). Accuracy Orders, Rate of Learning and Age in Morphological Acquisition. In C. Muñoz (Ed.), *Age and the Rate of Foreign Language Learning* (pp. 107-126). Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- [16]Larson-Hall, J. (2008). Weighing the Benefits of Studying a Foreign Language as a Younger Starting Age in a Minimal Input Situation. *Second Language Research*. 24(1), 35-63.

付記

本稿は大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号 S20510）「早期英語教育と臨界期に関する研究」の研究助成の一部をなすものである。なお本稿以外のこの助成による発表論文等は以下のとおりである。

<雑誌論文>

[1]服部孝彦, 「第二言語習得における臨界期研究」, 日本人類言語学会学術誌『人と言語と文化』, No. 11, (査読有), 日本人類言語学会, 2020, pp. 3-28.

<書籍の中の論文, 章など>

[1]服部孝彦, 第4章「言語習得と臨界期」, 『英語教育の諸相』, 共同文化社, 2021, pp.49-63.

<学会発表>

[1]Takahiko Hattori, “The Critical Period for Language Acquisition: The Role of Age Related Differences in Cognitive and Neural Function”, 日本言語文化学会第27回研究大会, 2020年9月12日, 大妻女子大学

<その他(招待講演)>

[1]Takahiko Hattori, “Acquiring Communicative Competence in English”, 神奈川県立国際言語文化アカデミア特別講演会, 2020年7月27日, 神奈川県立国際言語文化アカデミアホール(招待講演)

[2]Takahiko Hattori, “Critical Period in First Language and Second Language Acquisition”, Ruffles Institution, Singapore, & Shibuya HS Special Lecture, 2020年9月23日, オンライン開催(招待講演)

[3]Takahiko Hattori, 文部科学省・徳島県教育委員会主催, 徳島県外国語指導助手指導力等向上研修 (ALT Skill Development Conference in Tokushima), Developing Students' Communicative Competence in English as a Second Language, 2021年1月18日, オンライン開催 (招待講演)

(受付日: 2021年4月12日, 受理日: 2021年5月18日)

服部 孝彦 (はっとり たかひこ)

現職: 大妻女子大学英語教育研究所教授

米国ユニオン大学 (UIU) 大学院総合文化研究科博士後期課程修了. 博士 (Ph.D. in English).
専門は英語教育学, 応用言語学. 現在は第二言語習得のメカニズムに関する研究を行っている.
主な著書: *EFL Reading in Japan: Theory, Policy, and Practice* (共著, Mediaisland)